

土井大助著

手と光を失った少年が
教師になるまでの苦闘の物語

甦る翼の航跡



■著者略歴■

土井大助（どいだいすけ）

1927年 山形県鶴岡市に生まれる

東京大学法学部卒業

会社員，労組書記，新聞記者などをへて

現在著述業

主な著書『詩集・十年たったら』（新日本文庫）

『詩と人生について』（飯塚書店）

『小林多喜二』（汐文社）

『土井大助詩集』（青磁社）その他

日本現代詩人会会員，詩人会議会員，

日本民主主義文学同盟員

甦る翼の航跡

¥ 850 〒 160

1979年4月15日 初版

著者 土井大助

発行者 鈴木大吉

〒101／東京都千代田区西神田 1-3-6

発行所 株式会社 一光社

電話 東京 (292) 8723

振替番号 東京 4-181221

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします

土井大助著

甦る翼の航跡

手と光を失った少年が教師
になるまでの苦闘の物語

はじめに

へ幸福な家庭はすべてよく似かよったものであるが、不幸な家庭はみなそれぞれに不幸である。と、トルストイは長編小説『アンナ・カレーニナ』の冒頭に書いている。

幸福だった家庭が、とつぜん降ってわいた事件で、たちまち不幸な家庭になり変わるということも、この世にまれではない。

あの夏の朝、藤野高明少年の一家をおそった出来事は、それこそ運命の残酷としかいいようがないすさまじいものだった。

ながい戦争の終わった翌年（一九四六年＝昭和二十一年）の七月、九州・福岡市の郊外にある藤野家では、夏休みを迎えたばかりの小学二年の高明少年が、来春入学予定の弟と仲よく遊んでいた。二人は、小川からひろってきた不発弾をおもちゃに夢中だった。

とつぜんの炸裂。すさまじい爆発。床はぬけ、壁はくずれ、もうもうとした煙とはこりのなかで、幼い二人は血にまみれてたたきのめされた。

真夏の明るい太陽のしたで、弟は声もたてずにいのちをうばわれ、兄は一命をとりとめたが、両眼をうしなったりえに左右の手首をもぎとられた――。

これは、兄高明少年とその一家の、それから三十年にわたる物語である。

目次

はじめに

一 筑紫野の陽光をあびて

10

- ・健康優良児
- ・父岩雄と二脚の肘掛椅子
- ・やさしい祖母のこと
- ・終戦、そして

二 悲劇は突然襲った

20

- ・どっちがとおくまでとぶか
- ・きつと夢をみているんだ
- ・手術中にみた夢
- ・正ちゃんは死んだとよ
- ・お母さん、どげんしたとね
- ・先生、手がないノ

三 雪の下で蕾は息吹く

36

- ・自分のことは自分でやれ
- ・地べたにひれふして祈る
- ・ラジオを友にして
- ・忘れえぬ暗いことば

・ゆで卵の「料理」

・父の病氣

四 青春の陽だまりのなかで 52

・父のいのち

・入院と母の苦闘

・田園のなかの病院の日々

・もうひとつの「差別」の発見

・ある青年との出会い

・みずみずしいブドウの味

五 文字という名の翼 69

・自分の力で生きられるようになりたい

・みんな、眼が見えなくなればいいノ

・母と医師の愛の叱責

・北条民雄の『いのちの初夜』

・唇で点字を読む

六 光は東から 86

・再度、扉をたたいたが

・大阪からきたひと筋の光

・必死の編入学要請

・異例の「出張試験」

・満二十歳の中学二年生

七 学舎の門に入る 102

- ・夜行列車は夢と回想をのせて
- ・大阪市立盲学校へ
- ・母親の取り越し苦労
- ・念願の学校生活
- ・思いがけぬ出来事

八 孤独から集団の中へ 120

- ・はじめての帰省
- ・テニプレコーダーとマラソンと
- ・生徒会の会長に
- ・虹の会をつくる
- ・異国の少女との「さようなら」
- ・自分は将来何をしたいのか
- ・心に刻まれた教師像

九 希望と不安のなかで実らせた愛 135

- ・和子との出会い
- ・教師になりたい――大学受験勉強へ
- ・不合格、郷里で浪人
- ・閉ざされた大学の門
- ・九州大学聴講生
- ・苦悩をこえて婚約

十 雷雨をついて山へ 151

- ・ 日本大学通信教育部学生に
- ・ 兄を助けた妹
- ・ はじめての海水浴
- ・ 宝満山の雷鳴
- ・ 首都の冬空にひびくシュプレヒコール
- ・ スクーリングをのりきる

十一 愛と勝利への讃歌 171

- ・ 大学卒業へ最後のスパート
- ・ 卒業論文への挑戦
- ・ 結婚式の準備
- ・ 「運命」終楽章の響きのなかで
- ・ 新婚旅行は新潟へ

十二 まだ二塁、三塁がある 186

- ・ 働きたい！
- ・ 先輩、仲間たちの藤野就職運動
- ・ 教員採用試験を受けさせて……
- ・ 一枚のハガキ
- ・ 母校の非常勤講師に
- ・ ほろにがいコーヒーの味

十三 運命の扉はひらかれた 202

- ・越後路再訪での予感
- ・「時」を待つ
- ・再試験に合格、そして正式採用へ
- ・人生最良の日
- ・小さな手紙

十四 喜びと悲しみを心に深く

215

- ・教壇に立って
- ・新しい生命の誕生
- ・出版記念会で
- ・障害者運動のなかで
- ・青春と生きがい

エピソード——藤野高明氏との三日間

231

- ・最初の出会い
- ・「もし自分が……」と考えて
- ・家庭での素顔
- ・盲学校の授業を参観
- ・車中できいたこと
- ・まぶたに焼きつく福岡の街
- ・むすびに

あとがき

甦る翼の航跡

一 筑紫野の陽光をあびて

健康優良児

まず、藤野一家のことからはじめよう。

福岡市といえば、みのりゆたかな筑後平野の中心、重化学工業で発展した北九州工業地帯をひかえた九州随一の文化、商業都市である。町のまんなかを南北に那珂川が流れ、博多湾にそそぐ。川の東側が商人の町で「博多」、西側が黒田藩の城下町で「福岡」とよばれる。

北は博多湾から荒波の玄海灘に面している。気候は、九州といっても、北の日本海沿岸と似ている。からりと晴れる日は少なく冬はとりわけ寒い。

藤野の家は、博多駅から東唐津へ行く国鉄筑肥線の、二つ目の筑前高宮駅のちかくにあった。

小さい駅の出口からまっすぐの小道を五〇メートルばかり北へ行った左角。当時、そこからさきはいち

1 筑紫野の陽光をあびて

めんの田圃だった。

高明は、一九三八（昭和十三）年十二月二十一日、その家で生まれた。椅子職人の父岩雄、母スミエのはじめての子である。

高明は丈夫な子だったが、はげしい夜泣きで若い母をよく困らせた。母は寒い冬の夜でも、高明を抱いて駅の待合室へつれて行き、ほのぐらい電灯の下でねかしつたりした。

スミエは、人にすすめられて、翌年五月、高明を新聞社主催の健康優良児大会に出し入賞した。その翌年もつづいて入賞。円形と長方形の二個のメダルを首にかけて写っている裸の赤ん坊の写真を、大きくなってから高明はよく見せられた。高明少年は、そんなとき嬉しいような照れくさいような気持ちになって、目を半分つむったりした。日ましに戦争がひろがっていくなかで、丈夫で強い子と、まわりに期待されながら高明はすくすくと育った。一九四〇（昭和十五）年の九月には、弟の正明が生まれた。仲の良い兄弟だった。

父岩雄と二脚の肘掛椅子

ここで、父・藤野岩雄についてふれよう。

福岡の藤野の家は、いまは高宮駅のすぐまえにある。高明が生まれた家から、いっそう駅にち

かいところに母のスキエが一人でくらししている。その家に一脚の木製の肘掛椅子がある。ごく普通の、ていねいにラッカーを塗ってある目立たない椅子だが、見かけの地味なやさしさとはうって変わって、じつに頑丈にできあがっている。作られて三十年もたっているのに、どの部分にもゆるみがきていない。腰をかけてもギスツというような音一つしない。そのうえ、尻のおかれたカーブ、ひざの高さ、肘をおく部分の感じなど、ほとんど木製とは思えないほど、坐ったものの全重量をびったりとやさしく深くうけとめてくれる。それでいて、一本の釘も使われていない。これとまったくおなじ作りの椅子が、高明の妹良子の家にもおかれている。こちらと同様に、ちよつとした狂いもスキもみせていない。高宮の家の椅子と双生児である。

母のスキエにきくと、これは二つとも、むかし岩雄が恩のある知人のために作ったセットの一部で、岩雄の死後しばらくして、その知人が遺品として記念に返してくれたものだという。わたしは、その椅子にさわり坐ってみて、それを作った人の誠実さと技倆にじかにふれる思いがした。この椅子こそ、何よりも父岩雄の手柄を語っているだろう。

岩雄は逆境に生いたった苦勞人だった。二歳のとき生母に死別し、その四年あとには父親を亡くしている。兄弟にもめぐまれなかった岩雄は天涯孤獨の身になった。親類にひきとられて、高等小学校を卒業すると、勉強が好きだったのにそれをあきらめて、大工の見習いとして住みこみで働くようになる。負けずぎらいでなにごとにも勉強熱心だった岩雄は、やがて腕のいい椅子職

1 筑紫野の陽光をあびて

人として認められるようになった。

父が精巧な木工用具をこつこつ買い集めるかたわら、読書好きで本棚になん冊も分厚い専門の本をならべていたことを、高明はいまでも思いだす。むずかしい漢字やこみいった図面、それにめずらしい家具類の写真が高明少年の興味をひいた。

岩雄は、やせ型の長身で、スポーツの好きな人だった。とくに野球が好きだった。観戦するだけでなく、勤め先の九州飛行機チームでは二塁手の五番打者だった。その会社に岩雄は大工職として勤務していた。

高明は、父が甘党だったことをおぼえている。母は父のために、よくぜんざいやおはぎやまんじゅうをつくった。そんなとき、父はなんともいえないうれしそうな顔をした。

幼いころのむつまじい家庭のことを、高明はつぎのように回想している。

「おはぎといえば、私には一つの思い出がある。父が仕事に出かけたあと、母が台所に立っておはぎをつくりはじめる。やがて、あずきあん和黄な粉で見るからにおいしそうなおはぎができる。それを重箱につめ、若い母親は私の手を引き、弟の正明を背中に郊外電車（西鉄大牟田線）に乗って上日佐^{かすがはら}にある父の職場まで出かけて行くのだ。昼休みを告げるサイレンの音が尾をひいて消えると、たくさん労働者たちが工場の中から吐き出されてくる。その中に日焼けした父の顔が見えた。その大きな目が私たち三人を見つけると、手を上げ足ばやにこちらに歩いてくる。

私たちはひろびろとした飛行場の片隅のベンチに腰をおろす。父の親しい同僚も加わって楽しい昼ごはんだ。砂糖や小豆が極度に欠乏した戦争中であつたが、母は甘党の父や子どもたちのために知恵をしぼり、どこからか工面をつけていたのであろう。やがて、昼休みが終わり、父たちが仕事に戻っていても、私たちはしばらくの間、飛行機を見て遊んだ。飛行場では数多くの軍用機が、いかにもかっこよく日の丸の浮き出した銀色の翼を静かに休めていたV

やさしい祖母のこと

藤野の家には、おばあさんがいた。阿部ハルというその人は実の祖母ではない。小さいとき両親をなくした岩雄を、かげになりひなたになって育ててくれた人である。血のつながりもうすい、遠い親戚筋にあたる人だったが、岩雄は結婚後も、この人をひきとっていっしょに生活していた。高明は、このおばあさんに心底しんそこかわいがられて育つた。実の祖母以上の、ほんとうのおばあさんだった。

高明がハシカにかかり、高熱を出したときも、目が見えなくなったら大変だといって、一昼夜一睡もしないで、まぶたの裏側へうちわで風を送りつづけた。ハル自身、銭湯で感染した風眼で片目を失明していたので、高明を不幸な目にあわせたくないという気持ちで、ひとしおつよかつ

1 筑紫野の陽光をあびて

たのである。

戦争が末期に近づくにつれて、飛行場ではおぎを食えるといったのどかなことは許されなくなった。敗戦の一年まえ、岩雄は海軍に召集され朝鮮にわたった。十一月には、すぐ下の妹美智子が生まれた。

あけて一九四五（昭和二十）年四月、高明は、はげしい空襲下の敗戦直前に、福岡市立高宮国民学校（戦争中、小学校はそう呼ばれた）に入学した。一年赤組。詰襟の制服の左胸に赤いマークを縫いつけてもらって高明は得意だった。

絵を描くのが大好きだという若い女の先生が担任だった。高明にはその先生がとてもきれいに見えた。第一学期の終わり、はじめての通信簿で、算数と体育が「優」だったことを、高明はいまでも忘れない。

父岩雄は、五月に軍隊からよびもどされ、技術者として九州飛行機会社にかえってきた。藤野の家は、祖母、父母、兄妹三人というもとの生活にもどる。毎朝、父は戦闘帽、ゲートルの姿で会社に出かけ、高明は元気な一年坊主として学校へ行く。

にわか雨が降ると、学校へ迎えに行くのは祖母ハルである。他の父兄にまじって、傘をもったハルが学校の昇降口で高明を目をはそめて待っていた。

近所にお産があればきまってハルが手伝いによべれた。手伝い先で、その頃めったに口にでき